

第2回市長とG O郷トーク 会議録

団体名	鹿屋市PTA連絡協議会
日 時	令和8年8月24日（月）18時30分から19時30分まで
場 所	鹿屋市役所 3階 庁議室
参加者	鹿屋市PTA連絡協議会 10名
	市長、総合政策部長、健康こども部長、教育部長、秘書広報課職員

意見交換

- 1 地元に帰って子育てしたくなる鹿屋市とは
- 2 市がPTAに期待すること、市と協働できることとは

【参加者からの主な意見】

1 地元に帰って子育てしたくなる鹿屋市とは

- 子ども達には1回市外を見てほしい。1回外を見て、それでもその時に子育てを鹿屋でしたいと帰って来られる街になってくれればいいと思う。ずっと鹿屋にいてくれてもいいが、外を見て大きくなって帰ってきてもらいたい。
- 子育てなどに対する資金という部分で、都城市はふるさと納税が鹿屋市の4、5倍くらいと聞いている。多分扱っているのは焼酎や肉などほとんど一緒なので、もっとやれるのではないかな。
- 創作舞台「野里国民学校」に娘と行って、最初から最後まで泣きっぱなし。感動を訴える作りにはなっていると思うけれども、そういうものがこの地域にあって、私はこの鹿屋が好きなのは、私たちはこうやって今、平和に暮らせていて、その土台にいる自分たちがそれを誇りに持っているからだと思う。これを他県にも発信していく必要があると思う。
- 鹿屋に引っ越して来てから、段々給食費の無償化など、恩恵をいただいたので、ありがたいなと思っている。そういう話をする、すごくいいねと子ども達も話しており、ちなみに長男が今東京に住んでいるが、やはり将来的には鹿屋に帰りたいと言っている。
- 自分達が育っている時には、田舎嫌だなと思っていたけれども、後々考えたら、ここだったよねと思えるところに帰って来るのだろう。意外と同級生も、九州内の大学に行った子は、かなりの確率で帰って来ると思うが、九州外に出るとなかなか帰って来ない。
- リナシティは高校生がたくさん勉強している所があるが、鹿屋市内には意外と勉強する場所がない。図書館まで行かせるには、あの坂は子ども達にとってかなりの壁である。親としても図書館に行かせるのは少し心配だけど、リナシティはまあまあいいかなというところ。
- 都城は図書館がすごい。よく私もわざわざ行くけれども、都城の図書館に行くと、やはりそこでお金を落とす。その辺のカフェでランチをして、子どもを連れてよく行ったりもする。なので、図書館を何とか若者が来れそうな場所、あとはおしゃれな感じにして欲しい。高齢の方も冷房が効いていたりするので来られる人も多い。センテラスの図書館もすごく素敵。鹿屋の図書館をどうにかしてほしいなという希望がある。

《市長》

- 令和8年の「鹿屋市二十歳の集いにおけるアンケート結果」では、参加者750人中、回答数が525人。そのデータから、鹿屋を離れても鹿屋に戻りたいという20歳が多いことと、現在鹿屋に住んでいる中で魅力を感じている20歳が多いということ。それから学生時代までの関わりの中で、モデルとなる大人の姿を通じて鹿屋に住みたいというような意見になっていることが読み取れる。
- ふるさと納税については、都城が約200億円、鹿屋が約40億円で、大体その半分が市に残る。鹿屋の場合は40億円だが、全国1740くらいの自治体の中で59位と鹿屋も決して少なくない。都城や宮崎が約200億円、大崎町が60億円、志布志も同程度ということで、マンモスが近隣のあちらこちらにいる。その中で鹿屋の色々な魅力を作っていけないといけない。
- 公共が施設を整備すると公共単価ということで、改めて非常に高いと思うが、そういった環境づくりを通じて、民間の事業者にどんどん投資してもらいたい。今回、UHA味覚糖が来ていただけるということで、やはり志布志港の整備、あるいは高速交通網体系が整備されているなど、そういったトッピングセールスも含めて、前のめりにやっていきたいと思っている。
- 経済的な支援も含めて、子育てにお金がかかるというものを払拭していくことが大切な切り口だと思う。それプラス、あるデータによると、結婚したら生まれてくる子供の人数は昔も今もそんなに変わっていないという話もあるようなので、いかにして結婚していただけるような、そういった出会いの場の創出というものも重要なことではないかなと、よく議論の中でも出てくる。
- この地域で子育てしたいとか、あるいは養育したいということの発信の仕方としても、自然がいっぱいあるとか、食の宝庫とか、それから適度な都会、適度な田舎、住環境のゆとりのある状況を発信していくことも今後の大きなテーマだと思う。
- デメリットもいっぱいあるけれども、メリットもしっかりと発信していきたい。やはりこの地域に住んでいる自分たちが幸せを感じながら、それをまた外部の方々も見ているだろうし、自分たち一人ひとりも上手く発信していけたらいいと感じている。鹿屋市として、あるいは鹿児島県として、しないといけないこともあるだろうし、その中で自助、共助、公助でないけれども、自助共助の部分でも発信できる部分もいっぱいあると感じた。

2 市がPTAに期待すること、市と協働できることとは

- 他の鹿児島市や県のPTAなどに行ってみると、鹿屋のPTAは組織がしっかりしている。鹿児島市に関してはPTAが解散する所が結構出てきている中で、鹿屋はまだない、参加者も多いところではある。今のPTAに行政からどういう期待があるのだろうか。
- PTA、町内会、自治活動にしても、役員の方は忙しく、活動回数が全然違う。大体秋口ぐらいになると、お母さんたちから有休を使い切ったので、次の会は行けないと言われる。大事な休暇は何に使ってもいいが、全てPTAで使い尽くしてしまったという何人かの声を聞いて、色々な行事を負担のない行事に変

えている。自治活動の休暇を別途に作ってもらい、P T Aや町内会の活動に出る制度をまず市が作って欲しい。

- うちの学校では離任式の打ち上げを公民館でしていたがやめて、今はお店でしている。昔は公民館を借りて80人くらい呼んでしていたが、お母さんたちが前の日に買い物をして、当日の会場準備をして、翌日に片付けをしていた事が分かって、大変な事をさせてしまっていた。
- 我が子が例えば五年生とか六年生とかメインになった時に、注力できる環境は本当に必要だと思う。自営業の人間から見ると、欧米などでよく聞くのは、日本はまだボランティアに対して弱いという意識があるので、そこをもっと評価すべきだと思う。そのような取組をしている企業から買いたいし、食べたいし、雰囲気を作っていきたい。P T Aは先生たちに対しての応援団だと思っている。
- 教育委員会が何をしているか分かりやすい方がいい。校長先生も引き受けて、市がこういう方向で教育委員会を思っているから、私はこういう学校づくりをしたいというのを、もっと字を少なくして、A Iなどを使って絵で表現して教えてくれたら、P T A会長も更にプライドを持って取り組むようになると思う。

《市長》

- (教育部長) P T Aフェスティバルは素晴らしい取組だと思うので、続けていただきP T Aが素晴らしいものであるとアピールしていただければありがたいと思う。もちろん市も、教育委員会だけではなく、各部各課も協力できる事、連携できる事があれば、一緒にさせていただきたい。
- (教育部長) 職務に専念する義務の免除というのがある。自治活動や、P T A会長になれば、入学式、卒業式などある時に、有給休暇ではないけれども、職務に専念する義務を免除するというわけで、少し説明が難しいが、休みが取れる制度がある。
- 今まで閉じられた空間だった学校が、例えばコミュニティスクールや、地域に開かれた学校にするというのは、同じような問題意識の中で制度としては整ってきていると思う。
- そこに参画する方々は、P T A会長や、あるいは町内会長など限られてしまっているところで、それをいかに一般の会員に広げていけるのかということが問われているだろう。そのためには字の少ない絵を使った見やすい表現も必要だろう。

【閉会あいさつ】

《市長》

- 今回同席の職員も町内会やP T Aなど、地域で活躍している中核メンバーである。そのような中で鹿屋市役所ができること、すべきこと、自分たちがやらないといけないこと、家族でやらないといけないこと、あるいは団体でしないと

いけないこと、それが明確な区分があるわけではなくて、共生協働の中でいかにして発揮していけるのか。

○また、自分たちの矩を踰えた（のりをこえた）部分に、実はボランティア精神とか、あるいは尊き、相手を慮る気持ちとか、そういったものが含まれているのではないかと思う。

○いずれにしても、P T Aの活躍なくして、鹿屋市の教育は成り立っていないという強い確信の中で、また引き続き我々を引っ張っていただき、色々な協働の中で頑張っていけたらと思う。こどもまんなか社会はこれからの大きなテーマなので、一緒になって頑張っていきたい。